

グラズノフ/アルト・サクソフォン協奏曲変ホ長調 Op.109

長年、ペテルブルク音楽院の院長を務めたアレクサンドル・グラズノフ（1865－1936）は数多くの作曲家を育てたが、ショスタコーヴィチもその一人である。グラズノフは少年時代、ロシア五人組のバラキレフに才能をみいだされ、その後、リムスキー・コルサコフの指導を受けたことから、卓抜なオーケストレーションの技術を磨いた。亡くなる2年前、移住先のフランスで作曲されたサクソフォン協奏曲には、その力量がよく現れている。チャイコフスキーのロシア風ロマンティシズムを継承しながら、フランスの流行も意識している。テンポの異なる3楽章をまとめた単一楽章で、独奏楽器と弦楽のバランスが絶妙。シンプルながら楽器の可能性を生かした佳曲として、サクソフォンの古典的なレパートリーとなっている。

白石美雪

楽器編成：弦5部、独奏アルト・サクソフォン（スコア上の表記）

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます